

開催地名：兵庫県播磨町	
開催日時	令和元年 12 月 14 日（土） 10：30 ～ 12：00
開催場所	播磨町中央公民館大ホール
語り部	草 貴子 （宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織、消防団、民生委員ほか関係団体 約 150 名
開催経緯	近年大きな災害が起こっていないため、住民の災害に対する危機意識が低い。また、若年層の訓練等参加率が低く、取り組む役員の高齢化が進行していることや、町内自主防災組織でも積極的に取り組む地区と取り組みが進まない地区があり、取組の格差があることが課題となっている。
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>私の住む仙台市泉区は、人口 21 万 5 千人の政令都市である仙台の副都心であり、ベッドタウンである。仙台市は 5 つの区に分かれているが、泉区は内陸部であるため、東日本大震災においては津波の被害はなかった。</p> <p>私の所属する市名坂東町内会は、平成 20 年に仙台市の泉区東部に設立した。現在加入数 186 世帯の町内会で、働き盛りの 40、50 代の方や、単身赴任の家庭が多い中で、必然的に私達女性が立ち上がり、作り上げた町内会である。役員 8 名全員が女性であることや、設立 2 年目に建設した集会所のために銀行にローンを組んだことも、仙台市では初めてのことだ。</p> <p>町内会の 3 つのスローガンの中に、防災、子育て支援、ふるさとづくりとあるが、中でも防災に特に力を注いだ。身の丈にあった町内会、オリジナリティーのある町内会、そして、女性であってもひるまないことを心に秘めて、まちをつくるために中核となるものとして、人が集まる場所、人を集める場所がなくてはならないと考えた。銀行にローンを組んでまでも、集会所建設にこだわったのはこれらの思いからである。普段の町内会活動においても、活動できるのは主婦だけで、高齢者も少ない実情から、子ども会以外の組織はあえて作っていないため、「町内会」＝「自主防災」＝「婦人防火クラブ」といったところである。</p> <p>（2）東日本大震災</p> <p>地域では、電気は 2～3 日、水道は 3～4 日、ガスは 1 カ月で復旧したので、各自が持ち寄った材料で子供達が調理するなど、ほのぼのとした時間も取れた。翌日から、折りたたみリヤカーで指定避難場所へ支援物資を引き取りに行ったが、支援を受けたのは 3 月 12 日と 13 日の 2 日間だけで、その後は各家庭で対処していただいた。集会所に集まった子供たちは、私達が区役所で得た病院や給水車の情報等を、町内に広報するのに大活躍してくれた。学校も休みになっていたため、避難者の大学生と高校生が「何か出来ることを」と申し出た時に、「寺子屋」という形で、子供達の勉強の面倒を見てもらうことにした。女の子は、小</p>

さい子の子守りをしたり、男の子は公園で鬼ごっこをしたり、それぞれができることを一生懸命していたように思う。

(3) 震災後の活動

市名坂小学校区には1万名以上の方が住んでおり、小学校を拠点とした町内会、連合町内会、市民センター、児童館、民生委員、青年団、PTA、婦人防火クラブ等の20の地域団体がある。これらの組織を取りまとめ、平成25年度に運営委員会が発足した。行政に頼るのではなく、私たち地域住民一人ひとりの声を聞きながら、私は初代事務局長として邁進しているところである。

委員会では、市民センターや児童館等の施設との情報共有化、救護班、総務班、情報班等の各班の具体的な活動内容の充実化を図り、スムーズな運営を心がけている。そして、女性ならではの視点を大いに生かす、女性コーディネーター部門を設けたことが大きな特徴である。

(4) さいごに

誰もが経験したことのない1千年に一度と言われる大震災の中で、それぞれの役目を、それぞれが自分なりに一生懸命果たした。子供だから、男性だから、女性だからとかではなく、私の役目、あなたの役目、それぞれが違っていいと思う。

私は、これからの自分の役目は何であろうか、考えて悩んだ。このとてつもない震災を受けて、人間の無力さ、生命の尊さと儚さ、哀しみの受け止め方、人の優しさを感じた。生かされている私達は、しっかりと生きなければならない。自然災害に立ち向かうことは難しいけれど、「防災」や「減災」について考え、実践し、そして一時、一瞬を大事にしていかなければならない。それが私の答えである。



開催地より

語り部の経験に基づく具体的なお話はとても分かりやすく、参加者の今後の活動に大いに役に立つ内容であった。住民の自助意識を高められたと思う。